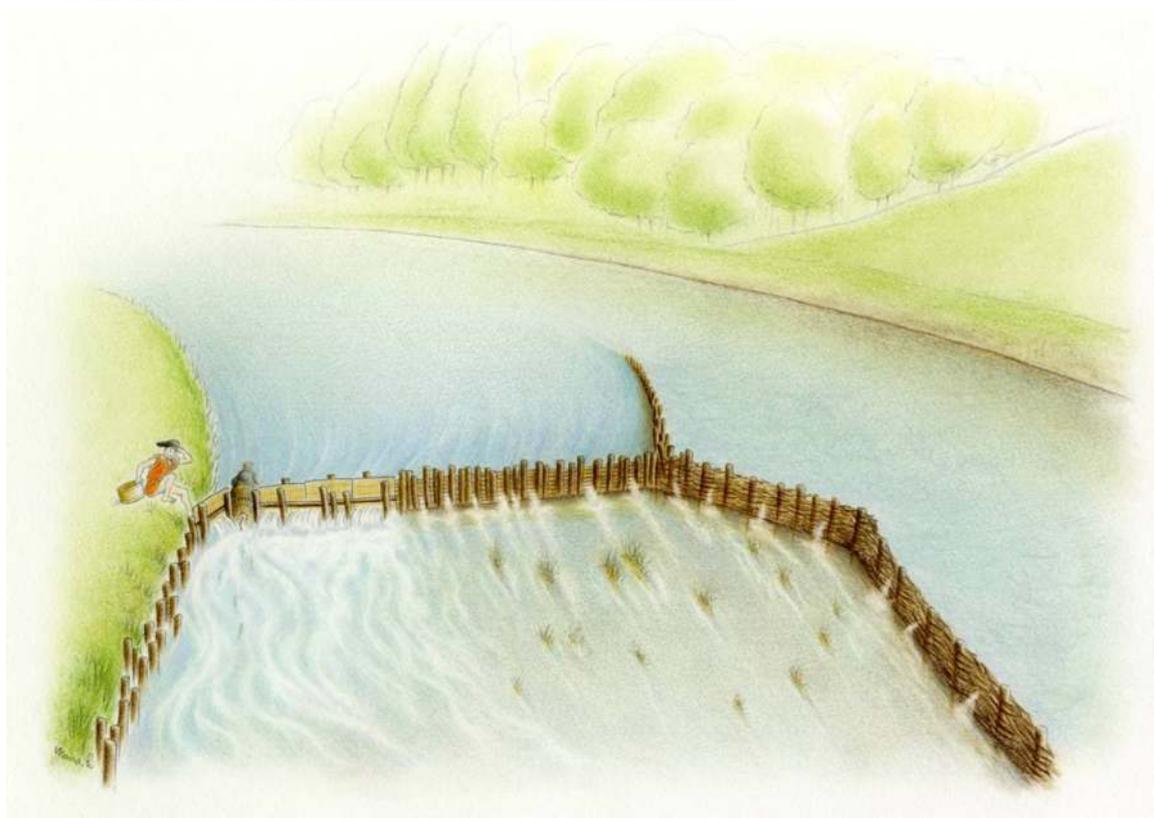


# 関津遺跡現地説明会資料

## — 鎌倉時代の<sup>やな</sup>築 —



平成 23 年(2011 年) 3 月 12 日

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

## 1. 調査の経緯

関津遺跡では、これまでの発掘調査で、後期旧石器時代の角錐状石器、飛鳥時代の日本最古級の墨書土器、奈良時代の幅員 18mの規模をもつ田原道、その沿道に配置された官衙（役所）や田上山作所の関連施設、硯、墨書土器、土馬、製塩土器など多種多様な出土品、鎌倉時代の集落と多量の輸入陶磁器や大和（奈良県）から搬入された瓦器、呪符木簡、絵画木板、農具などの木製品、室町時代の港湾施設の一部が見つかるなど、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっています。

また、本調査地点の南に位置する**関津城跡**は、在地土豪である宇野氏の居城と考えられ、平成 20～21 年度の発掘調査によって、実態が不明であった在地の城郭の内部構造や全体構造が判明する事例として注目されています。

## 2. 発掘調査の状況

今回の発掘調査では、江戸時代の洪水跡、戦国時代の区画溝に囲まれた井戸を伴う屋敷地、鎌倉時代の井戸、古墳時代～平安時代の流路跡など、概ね 4 時期の遺構・遺物を検出しました。なかでも、河川跡に設置された鎌倉時代の築は、規模や構造がほぼわかる状態で見つかりました。

## 3. 築<sup>やな</sup>について

### (1) 築とは

築は、川を遡上もしくは降下する魚を獲る定置漁具で、水流を強制的に狭い範囲に集め、この水流を遡る或いは降る魚を、囲い、もしくは網の中に誘導して漁獲する漁具です。築には、川を遡る魚を獲る「のぼりやな」と川を降る魚を獲る「くだりやな」があります。

国内で現在操業されている築は、産卵のために川を降る鮎を獲る「くだりやな」が圧倒的に多いようですが、琵琶湖水系においては、コアユ、ビワマスを対象とした「のぼりやな」が特異的に発達しています。

かつては、琵琶湖に流入する河川の多くに築が設置されていましたが、近年の開発により次々と姿を消し、現在では、姉川、安曇川、石田川、知内川で稼働している築をみることがます。

琵琶湖水系の築の構造は、上記湖西の三川は、カントリーヤナと呼ばれる、基本的に共通する構造をもっていますが、他の河川の築は、川ごとに違うといっても過言でない程、バラエティーに富んでいます。しかし、魚を水流に乗せて遡上させ、最終的に狭い箇所へ誘導するという漁獲原理は共通しています。

- このため築は、
- (1) 魚を遡上させないために河川を遮断する施設
  - (2) 魚を乗せる水流を造る施設
  - (3) 魚を誘導し、漁獲する施設

を組み合わせて構成されています。

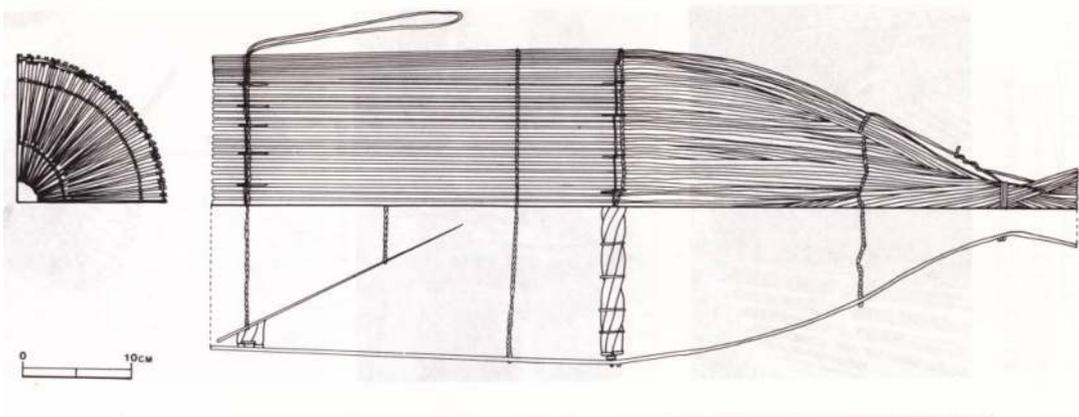
築の最終漁獲部の構造は多様で、四つ手網や、さで網ですくい獲ったり、生け簀すに落とし込んだり、釜うけ（入り口から入った魚が戻れなくなるような仕組みを付けた漁具）に閉じこめたりします。



安曇川のカトリ築



姉川の四つ手築



釜の例(大津市喜撰川で使われた釜)

## (2) 文献資料に見える築

築に関する資料は古くから知られており、既に、『古事記』や『日本書紀』に登場しています。

近江では奈良時代に朝廷に魚を供給する「田上網代」が置かれ、鎌倉時代まで存続したことが知られています。この田上網代は、アユの稚魚である「ヒウオ」を捕る「くだりやな」とされています。また、室町時代の『石山寺縁起絵巻』には、瀬田川に設置された「くだりやな」が描かれています。

このほか、野洲川を始めとする河川には、神社に神饌としての魚を供進する築が多数設置されていました。

## (3) 発掘調査された築の事例

発掘調査により確認された築の事例は比較的少なく、県内では、長浜市の尾上浜遺跡から縄文時代の築状の遺構が、米原市長沢遺跡からも築状の遺構が見つかっています。東近江市の斗西遺跡からは古墳時代の「のぼりやな」の調査例が知られているのみです。

県外では、愛知県朝日遺跡から弥生時代の築が見ついているほか、北海道においてサケを対象とした築状の遺構が報告されていますが、明確に鎌倉時代の築と判断できる発掘調査事例は、当協会が把握している限りではありません。

## 4. 関津遺跡で見つかった築

### (1) 築が検出された場所

調査区の東から西に向かって緩やかにカーブして流れる河川跡の屈曲部に設置されています。

この河川跡は、調査区の南東を流れ瀬田川に合流する嶽川（だけがわ）の前身となる河川跡と考えられます。

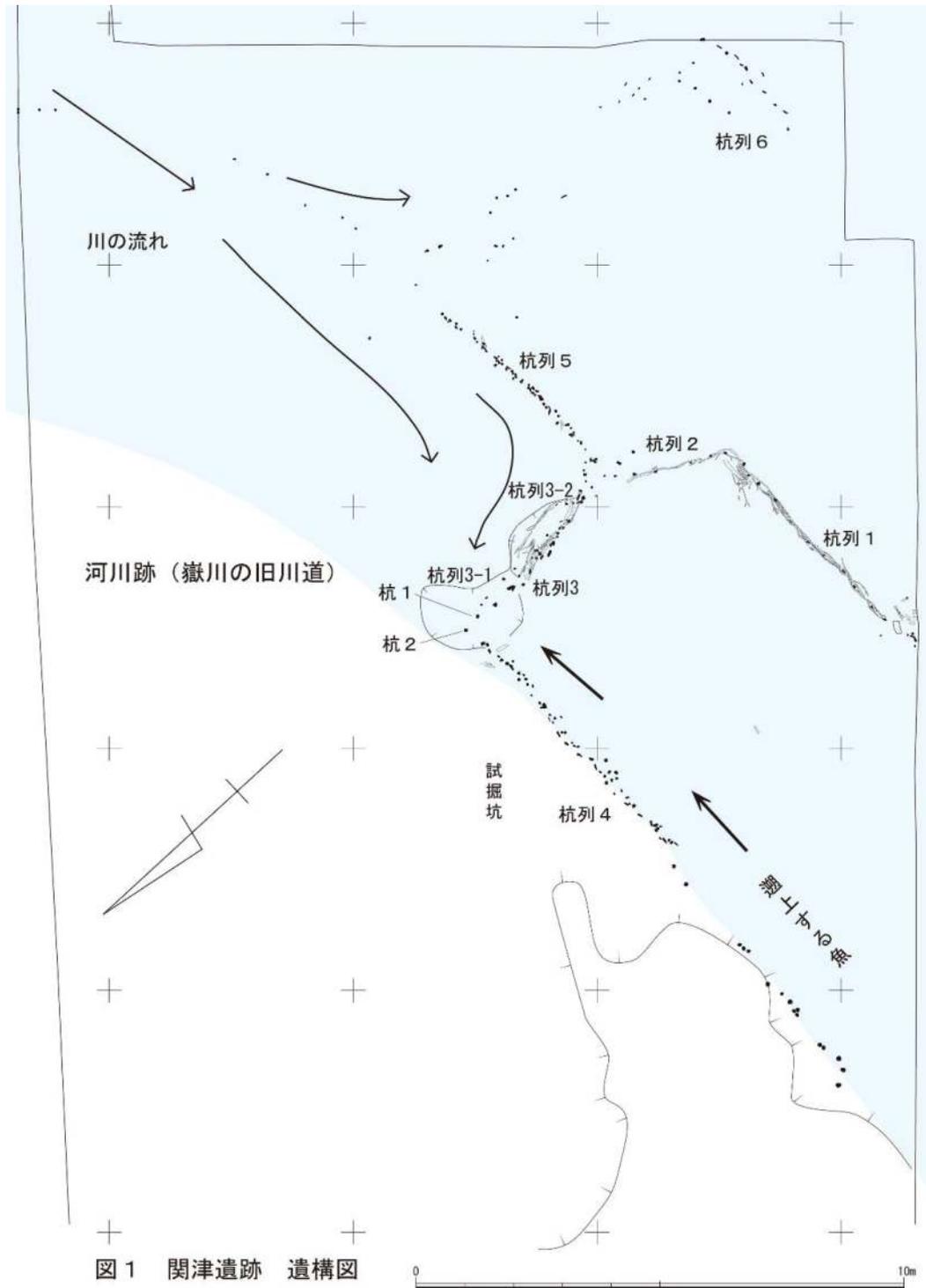


図1 関津遺跡 遺構図

## (2) 築の構造

### 川の流れは、

- ① 今回見つかった築を構成する杭は、何れも上部が失われており、その高さや当時の水深を正確に復元することはできません。しかし、川岸と川底との高低差を勘案すれば、水深 50 cm 前後と想定され、従って、杭の高さも川底から 1 m 前後と考えられます。
- ② 川は東から流れ、築付近で湾曲しており、このカーブに沿いつつ、水量を受けるように設置された杭列 5 により、流れの多くが北岸寄りに誘導されます。
- ③ 杭列 5 に沿って流れた水は杭列 3 により遮断され、杭列 3 の北の隙間から流れ落ちますが、操漁時には、この部分に「水は通すが、魚は通さない程度」の目合の簀が設置してあったと考えられます。簀 (す) は、この部分のみ 2 重に設置されている杭と杭の間 (杭列 3 - 1) にはめ込まれていたと考えられ、水はこの簀の隙間から流れ落ちます。
- ④ 同様に、杭列 4 の東側にも幅 60 cm ほどの隙間があることから、この隙間にも簀が張ってあったと考えられます。
- ⑤ 築の中に流れ込んだ水は、北岸に集められて強い流れとなって流れますが、築の東に至り、拡散し、浅く緩やかな流れに戻ります。

### 魚の動きは、

- ① 下流から遡上してきた魚は、流れに沿って泳ぐうちに、築の中に入り、やがて北岸を流れる強い流れに誘い込まれ、さらに遡上を続けますが、杭列 3 および杭列 4 の端に張られた簀が行く手を遮り遡上できません。簀の付近を泳ぐ内に、杭 1 と杭 2 の間にある隙間に誘い込まれ、ここを遡上しようとしています。
- ⑦ この隙間の直上に、四つ手網もしくは筥 (うけ) が仕掛けてあれば、遡上してきた魚はここで、まさに一網打尽となります。

### 魚を獲る部分は、

- ① 漁獲部分と考えられる杭 1 と杭 2 の間付近には他の杭が認められないことから、杭や簀により構成される囲い込みはなかったと考えられます。
- ② また、岸から漁獲部分に向かう栈橋上の痕跡も無いことから、四つ手網の設置も困難と考えられ、また、栈橋無しの四つ手網の操作は、操漁時に常に人間が水につかっている必要からこの漁法は想定しにくいです。
- ② 漁獲部分の直上部の川底は皿状に窪んでいますが、この部分は人為的に掘り窪めたものであることから、この窪みに漁獲装置を設置したと考えられ、その装置は筥であったが可能性があります。
- ③ 現在の「のぼりやな」で筥を用いる例はありませんが、かつて行われていた築漁では筥を用いる例があり、「くだりやな」で筥を用いる事例は多数あります。現在、琵琶湖水系で筥が用いられないのは、中に入った魚が傷むためであり、すぐに消費する魚を捕るためであれば、筥を用いることに妥当性があります。また、筥であれば、長時間放置しておいて、操漁者が水に入るのは、水揚げ時のみよく、遺構の検出状況からの推測に一致します。

## (3) 漁獲対象となった魚

この築の漁獲対象となった魚は、瀬田川から遡上してくるアユ、ウグイ、ハス、ニゴイ等と考えられます。その理由として、遺構が検出された川底は砂礫質であり、水深が浅く比較の流れも急であったと考えられることから、泥地性で止水を好むコイ、フナ類は除外されます。

なお、瀬田川に棲息するコアユ、ウグイ、ハス、ニゴイ等魚は、現行の築漁でも漁獲（混獲）されています。

#### (4) 見つかった築の年代

築が設置された川底から出土した土器類は鎌倉時代の特色を示しており、また、川岸で検出した遺構から出土した土器類も鎌倉時代であることから、見つかった築は、鎌倉時代（13世紀）に設置されたと考えられます。

今回見つかった築は河川を完全に遮断して、魚をすべて獲るのではなく、河川の約1/2に築を設け、魚が上流に遡上できるよう配慮されている工夫がすでに行われていることも明らかになりました。

### 5. まとめ

平安時代から鎌倉時代には、アユを捕獲するための網代（築）が関津遺跡の西を流化する瀬田川に設置されていたことが『延喜式』などの文献から知ることができます。

また、瀬田川の支流である田上川に設置された網代（築）については、平安時代の和歌に「せきかくる谷上川の上り築さかまく風の落ちぞわづらう」（『新葉和歌集』永徳元年（1381年）宗良親王撰に収められた平安時代中期の藤原知家の作）、鎌倉時代の和歌には、「あじろ打つ田上川の岩波も山おろし吹けばもみぢしにけり」（『萬代和歌集』宝治2年（1248年）源家長撰）等と謡われています。

今回、関津遺跡で見つかった網代（築）は、鎌倉時代に瀬田川の支流である嶽川に設置された上り築であることが明らかとなりました。

これまで、古代から中世の上り築については、全国的にみても全容が判る調査事例は知られていません。今回見つかった上り築の残存状況は比較的良好でありほぼ全容が判明することから、上り築の構造が判る事例としてだけでなく当時の河川利用の在り方、漁業史、生業史など多方面の研究や景観復元に寄与し得る資料と評価できます。



築の全景 上流側から（北東から）